

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	佐藤臨太郎
2. 審査委員	主査：(岡山大学教授) 高塚成信 副主査：(上越教育大学教授) 平野絹枝 委員：(鳴門教育大学教授) 伊東治己 委員：(兵庫教育大学准教授) 吉田達弘 委員：(岡山大学教授) 福永信哲
3. 論文題目 Exploration Into the Effects of Recasts and Self-initiated Self-repair During the Output-based Interactive Activities on Japanese EFL Learners' English Learning (アウトプットを伴うインタラクティブな活動におけるリキャストや自己修正の、外国語として英語を学ぶ日本人学習者の英語学習への効果についての検証)	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 佐藤臨太郎 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 日時:平成26年2月22日(土) 13時30分～14時00分 場所:岡山大学教育学部本館言語教育系演習室 1. 学位論文の構成と概要 (構成) 第1章：序論 第2章：第2言語習得研究における主要な理論とリキャスト、自己修正に関する先行研究 第3章：日本人高校生初級レベル英語学習者へのリキャストの効果の分析と検証 第4章：日本人高校生中級レベル英語学習者へのリキャストの効果の分析と検証 第5章：刺激想起(stimulated recall)手法による日本人大学生中級レベル英語学習者へのリキャストの気づき(noticing)への効果の分析と検証 第6章：日本人大学生中級レベル英語学習者への英作文指導におけるリキャストの効果と分析 第7章：日本人高校生初級レベル英語学習者のインタラクティブな活動における自己修正現象の分析 第8章：日本人高校生中級レベル英語学習者のインタラクティブな活動における自己修正現象の分析 第9章：結論 (概要) 第1章では、本研究の2つの目的が述べられている。第一は、教師が学習者の誤りのある発話に対して、もとの発話の意味を変えず間違いを正しく言い直して文脈の中で与えるリキャストの効果をもとに日本人高校生、大学生を対象に分析することである。第二は、英語学習者が会話において自分の発話の中に問題点を見だし、自分で修正する自己修正現象について分析するこ	

とである。高校さらには中学においても英語での授業が進められ、英語でのやり取りがますます増えていく状況下で、リキャストと自己修正の言語習得への効果を検証し、学校現場への示唆を得ることが最終的な到達点である。

第2章では、リキャスト、自己修正の先行研究をまとめ、特にそれらに深くかかわる理論を概観した上で、第3章において、教室内研究の結果から、高校生初級レベル英語学習者にとってのリキャストの訂正的意図に気づいて修正(repair)することの難しさ、および教室環境下では必ずしも適切にリキャストが与えられていないという問題点が指摘されている。

第4章では、高校生中級レベル英語学習者を対象とした研究の結果から、リキャストは学習者の修正への効果が高く、情意的にも明示的な訂正より効果的であることが報告されている。

第5章においては、大学生中級レベル英語学習者3名を対象とした刺激想起手法を用いた分析により、学習者の修正は、気づきの指標になりうるが、了解(acknowledgment)の場合はそうではないことが判明した。また、データの分析から、中級レベルの学習者は、リキャストの長さや、変更点の数が気づきに影響を与えないとの示唆が述べられている。

第6章では、英作文において正確さと流暢さは両立し得ることが、高校生を対象とした実証研究で示唆され、大学生中級レベル英語学習者への英作文指導におけるリキャストは、書き直しにおいて、正確さ、流暢さ、複雑さの向上に貢献することが報告されている。また、文法の難易度にかかわらず、リキャストの書き直しへの一定の効果が認められている。

第7章では、高校生初級レベル英語学習者を対象とした教室内研究において、自己修正現象が、自由度の高い活動において頻繁には起こらないことが報告され、その原因と発話の特徴について考察された。第8章においては、ネイティブスピーカーとの一対一の実験環境下において、高校生中級レベル英語学習者は、言語的な誤りに対して比較的高い自己修正成功率を示し、成功率は文法の難易度にもそれほど影響されないことが示唆された。

第9章において、本研究をまとめ、教授における示唆を示した上で、研究の限界と問題点、さらに今後の研究への課題に言及し結論とした。

2. 審査経過

本論文は、日本人英語学習者(高校生・大学生)を対象として、スピーキングやライティングにおける誤りに対する教師によるリキャストと学習者自身による自己修正の実態を調査するとともに、それらの言語習得への効果を検証し、英語指導の在り方に示唆を与えることを目的としたものである。英語教育において、コミュニケーション能力が重視される中で、学習者の誤りに対して寛容で修正しないことをよしとする傾向があるが、言語習得を促しコミュニケーションできるようになるためには、教師と学習者自身による修正が必要であることに注目したことに本論文の意義がある。

本論文の独創性は、(1)リキャストに対する気づきと言語習得への効果を、学習者の英語学力レベルおよびリキャストの特性によって分析したこと、(2)スピーキングにおけるリキャスト研究を、ライティングにも応用拡大したこと、および(3)学習者による自己修正の実態を、学習者の学力レベルによって分析したことにより、審査委員に高く評価された。

審査委員会では、論文の内容と独創性に関して高い評価を受ける一方で、12に上る調査研究が1つの論文として必ずしもうまく統合整理されていないこと、とりわけ、リキャストと自己修正の関連性が明確にされていないこと、および対話相手による違いが考慮されていないことが指摘されたが、これらは、今後の研究の発展に資する助言として認識された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、佐藤臨太郎の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。